

第 16 回研究大会

「テーマ：令和の外国語教育 ～SDGs, ICT, PBL で世界とつながる～」

講師：吉田信介先生（関西大学教授） 宮下陽帆先生（立命館中学校・高等学校教諭）

宇津見あゆさん：関西大学外国語学部学部生／ 西林瑠美奈さん：関西大学政策創造学部学部生
宮下先生の 教え子の皆さん

第 16 回研究会は、吉田先生、宮下先生が実践されてきた教室での学びを「外」とつなぐ活動の事例を報告いただきました。前半の吉田先生のご講演では、近年話題となっている SDG s、ICT、PBL の歴史的・理論的背景と現状についての詳しい説明に続いて、先生がアフリカで長年取り組んでこられた JICA プロジェクトと国際双方向型探求学習での実践報告から得た知見をお話してくださいました。国際双方向型探求学習の事例では、海外への留学をきっかけに日本の解決すべき課題であるジェンダー問題に関心を持ち、その解決に向け、関西弁のかかるたを作成して意識付けに挑戦するといった学生の意欲的な活動報告がありました。

後半に実践報告をしてくださった宮下先生は、日本語・英語・中国語教育に携わられた広い視野と経験から、いわゆるグローバルサウスの国と学生をつなぐ実践をされ、実践を通して学生の意識に変化が生まれ、自ら考え、積極的に行動する姿が報告されました。バックワードデザインのもと一つ一つ丁寧にプロジェクトを計画された過程が印象に残りました。VUCA の時代を生きる 21 世紀の担い手たちには、世界の多様性を享受しながら、吉田先生が言われるように「外国語の学習を通して、寛容性・平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができる」人材に育ってくださることを願ってやみません。（文責：戎妙子）

秋季研究会 2022

「テーマ：効果的な異文化間コミュニケーションに必要なこと」

講師：守崎 誠一 先生(関西大学大学院外国語教育学研究科・教授)

外国語教育とは切っても切れない関係にある異文化間コミュニケーション。秋季研究大会 2022 は、果たしてどれだけ意識して教育実践をしているか、改めて問われる回となりました。異文化間コミュニケーション学は 1960 年代に始まった歴史の浅い学問領域とのお話でしたが、物理的にも空間的にもヒトとヒトの距離が縮まった今の時代において、この領域の知識を持つことは不可欠だと感じました。先生が強調されていたことは、ある外国語(極端に言えば英語)で「読む、書く、聞く、話す」の力が備わっていることと、文化的・言語的背景の異なる相手と効果的にコミュニケーションができることは同じではないということでした。効果的なコミュニケーションを生む要因は様々あるそうですが、お願いした講演時間が 100 分と限られていたため、「スキーマ」一つに絞ってお話してくださいました。スキーマとは、過去の体験を基に構築された認知構造で、人は新しく外部から入ってきた情報をこの構築されたスキーマに基づいて理解したり反応したり記憶したりするのだそうです。スキーマの機能は以下の7つ1) 選択:重要度に応じた情報の取捨選択、2) 解釈:情報の再構築、3) 統合・抽象化:似通った情報を統合して、一つの流れ etc

として理解、4) 精緻化:欠落した情報を補足、5) 周知:スキーマの強化・修正、6) 予知:今後の予測、7) 能率:情報をカテゴリー化することで、思い出す効率をアップ。我々は日々無意識にスキーマを活用しているので意識に上ることがない、ということで、スキーマについて説明していただいた後、実際に幾つかの問題に取り組みました。スキーマには、留学などの場合、事前に情報を持っていることで、直面する不安やもやもや感を軽減できるポジティブな働きがある反面、ステレオタイプの形成につながる負の側面があります。故に異文化間コミュニケーションで成功するためには、自分と相手のスキーマの違いを理解し、柔軟に自分のスキーマを変える必要があるのだそうです。そのために必要なのは適応力。そこで、各自どれだけ柔軟に変化に適応できるか測る「国際適応能力尺度」に挑戦しました。自分の傾向を初めて認識する貴重な経験をしました。

今回、守崎先生のお話を通して、垣間見た異文化間コミュニケーション学の奥深さ。機会があったら他の要因についてのお話も伺ってみたいと思いました。（文責：戎妙子）

学会からのお知らせ

2022年度の役員は以下の通りです。

役職	役員
顧問（学会）	竹内 理 研究科長・学部長・教授
顧問（総務委員会）	守崎 誠一 研究科学務委員長・副学部長・教授
顧問（紀要委員会）	高梨 信乃 研究科教学主任・教授
名誉会長	吉田 信介 名誉教授
会長	山根 繁 教授
財務委員長	*名部井 敏代教授
監査	今井 裕之 副学部長・教授
	山崎 直樹 教授
幹事長	山中 由香
総務委員会	*岩田 弥生 近藤 睦美 古屋 あい子
財務委員会	*神道 美映子 岡上 路子
研究大会委員会	*竹田 里香 上野 舞斗 浜谷 佐和子 竹ノ内 朋子
広報通信委員会	*戎 妙子 山本 祐太（IT） 前川 洋子
紀要委員会	*尹 惠彦 田中 晶子

（*委員長）

<編集後記>

2022年度の活動を総括すると『教室での学びを「外」と繋ぐ』をキーワードに挙げられると思います。そして、「外」と有効的に繋がるためには、異文化間コミュニケーションを促進する要因、阻害する要因を理解している必要がある。外教学会らしいテーマが貫かれた一年でした。

守崎先生は「異文化間コミュニケーションは“外国人”とのコミュニケーションだけを指すのではなく、身の回りの自分と異なる全ての人とのコミュニケーションを指すのです」と仰っていました。そして、「人がコミュニケーションをするのは、知らない人と対峙した時に感じる不安や不確実性を減らしたいという欲求があるから」とも。最近、コミュニケーションが苦手という若い世代が増えているように感じます。原因は様々あると思いますが、異文化間コミュニケーションの知識がそのような若い世代の苦手意識を解消するのに役立つのかと思いました。（文責：戎妙子）